



シリーズが会う

「ふう、ようやく解放された・・・」

リトルウィングの私社があるカフェから、1人のビーストの青年はそう呟きつつ歩いてきた。

彼の名前はギラム・ギクワ 通称『ギラム』

ビーストに似合う体付きをし、綺麗に焼けた茶色の肌が鍛え上げた筋肉をなおの事強調している肉体美を持つ青年だ。

ギラムは先ほどまで、上司のクラウチに入社時に半強制的にパートナーにさせられた少女、エミリアにつき合わされ食事を取っていた。今はその帰りだ。

『まったく、何で俺が付き合う羽目になったんだ？・・・パートナーだから仕方ないと言われてたらおしまいか。』

と、自分の心の中で呟いている事に突っ込みを入れつつ、ギラムは自室のルームに向かって歩いていった。

自室の前に行くと、ギラムは入室コードを入れ部屋に入った。

「あ、帰ってきた。お帰り。」

「ああ、ただいま。」

ギラムは部屋の中からかけられた挨拶を返しつつ、ベットのそばへと移動し、座った。

部屋に入ってきたギラムを見つつ、緑龍のメカがそばへと寄った。

この緑龍メカの名前はフィルスター 通称『フィル』

ギラムの部屋の管理を任されているGH500シリーズのパートナーマシナリーだ。

「なんかやけに疲れた顔してるな。彼女に振り回されたか？」

「彼女じゃねえよ。」

ギラムはフィルスターからの茶々を軽く流しつつ、そう答えた。

「ランチってことで結構付き合わされたからな。おまけにユートやクラウチ、その他もろもろが来る始末だ。」

「そりゃごくろーさん。俺みたいに部屋で大人しくしてた方がよかったんじゃないか？」

フィルスターは部屋に置かれたティーセットにお茶を入れつつ言った。

「それが出来たらそうしてた。 だが、」

「『アンタランチ1人でしょ？ 一緒にランチに付き合いなさい！』だもんな。 彼氏は大変だな。」

「だから彼氏じゃねえって。」

ギラムは再び同じセリフを言い、フィルスターからお茶を貰った。

「アイツはどう思ってるかしらねえが、随分となつかれちゃったな・・・」

「いいコンビと社内で噂され、ガーディアンズと行動を共にし、事件を解決したんだからな。ま、なつくのも分かるけどな。」

「お前は半分高みの見物だろ？ 羨ましいぜ、まったく。」

ギラムは注がれたお茶を一气飲みし、カップをフィルスターに返した。

「しばらく俺は寝る。 フィルは外に出るなり自由にしててくれ。」

そう言うと、ギラムはベットに横になり、寝てしまった。

「じゃあ部屋は閉めとくぜ。 彼女に襲われねえようにな。」

「だから違うって言ってんだろ。 さっさと行け。」

「へいへーい。」

フィルスターはそう言うと、主人を1人部屋に残し外へ出て行った。

部屋を後にしたフィルスターは、しばらく社内付近のロビーをうろついた後、ショッピング街のあるリゾートエリアへ出かけて行った。

所持金をたいして持っていないものの、見るだけタダと言うのを知っており、それを口実にいろいろ見ていた。

『あ、コレアイツが良く着てるブランドの服だな。・・・へえ、まあまあな作りなんだ。』

『最新のパーツか・・・ 悪く無さそう。 アイツに相談してみっか。』

『お、美味そう。 アイツ食うのかな、こういうの。』

などなど、フィルスターは心の中で呟きつつ店を見ていた。

ちなみに『アイツ』とは、主人のギラムだという事は、言うまでもないだろう。

それからしばらく見て廻った後、買い物袋を1つ引っ張りつつ、施設の一角にある公園までやってきた。

噴水の縁に座り、紙袋を足元に置いた。

『さてと、結構時間をつぶしたな。 アイツが起きたなら、連絡してくるだろうけど。』

フィルスターは腕に内蔵されたデジタル時計を見つつ、現時刻を見た。

時計はギラムが寝てから、約2時間ほど立った時刻を示していた。

『土産も買ったし、機嫌直しぐらいは出来るか。』

フィルスターは腕のパーツを元に戻し、辺りを見渡した。

辺りにはリトルウィングで活動していると思われる傭兵の他に、ショッピングを利用しに来た他の人々がそれぞれ遊んでいた。

「平和だな。・・・ん？」

フィルスターは辺りを見渡した後、気になるものを見つけた。

そこにはここらではあまり見かけないマシンリーであり、自分と同じGH500シリーズの青龍が、荷物を持って歩いていた。

そしてそのマシンリーのそばには、主と思われるキャストの女性がいた。

2人は仲良く話をしつつ、こちらに向かってくる。

『へえ、俺と同じナンバーのマシンリーを持った奴もいるんだ。 珍しい。』

フィルスターはそんなメカ2人を見ていた。

すると、

「あっ。」

その青龍がフィルスターを見つけた様子を示した。

「どうしたの？ ベルちゃん、あら。」

ベルちゃんと呼ばれたマシナリーのそばにいたキャストの女性も、同じくこちらを見た。

「僕と同じナンバーがココにもいたんだ。」

「こんにちは。」

2人はフィルスターのそばへと近寄り、挨拶をしてきた。

「・・・どうも。」

「君は、ココの社員のマシナリーなの？」

青龍はフィルスターを見つつ、問いかけてきた。

「ああ、そうだけど。」

「じゃあ僕達の先輩なんですね。」

青龍は嬉しそうにそういって、キャストの女性を見た。

その人は金髪のサラサラのロングヘアーに、キャストの証拠である顔の模様とヘッドホンをして
いた。

服装は蒼いシャツに白のプリーツスカート。 後ろには緑の羽が出ていた。

「お前らは？」

「私は最近ココに入社した、アリン・カーネと言う者です。 で、ベルちゃんは私のパートナー
マシナリー」

「本名はウィンドベルと言います。」

2人はフィルスターに自己紹介した。

その後フィル達は噴水の縁で仲良くお喋りをして、時間を過ごしていた。
気がつくと、辺りは夕方を示す空色になっていた。

「あ、もう夕方・・・ そろそろ戻らねえと。」

フィルスターは内蔵された時計を見つつ、そう呟いた。

「じゃあ、ご一緒してもいいですか？ 帰り道は一緒だと思うので。」

「ああ、いいぜ。」

「じゃあ行きましょうか。」

フィルスターはアリンの提案を受け入れ、3人は自室ルームがある社内ロビーへ戻って行った。

ワープシステムを使用し、3人はロビーへ

「では、私達はコレで。」

「あ、アリンさん。 ちょっと待っててもらえますか？」

「ええ。 いいですよ。」

アリンは紙袋を手に自室へ戻ろうとすると、ウィンドベルが引き止めた。
主人が止まった事を確認すると、彼はフィルスターのそばへ

「コレ、僕達のパートナーカードです。 交換してもらってもいいですか？」

ウィンドベルはしまってたあったパートナーカードを取り出し、フィルスターに差し出した。

「カードか。 いいぜ。」

フィルスターも同様にパートナーカードを取り出し、ウィンドベルと交換を交わした。

「じゃあ僕はコレで。」

「良かったら、私の部屋にいらしてくださいね。」

「ああ、またな。」

アリンとウィンドベルは一足先にルームのある通路へと入り、自室へ向かって行った。

『まさか仲良く馴れるとは思わなかったな。』

フィルスターは2人の入った通路を見つつ、そう思っていた。
すると、

ピピッ、ピピピッ

フィルスターの腕に内蔵された通信機が受信を示す音を鳴り、受信を示した。

「ん？　・・・ゲッ、アイツだ。」

受信相手を見て、フィルスターは毒付きつつ、通信をオンにした。

ピッ

「はいはい主(あるじ)、何？」

フィルスターはいつもの調子で通信相手に言った。

【何って随分だな。　結構暇つぶしに時間を使ってるみてえだから連絡をしたんだっつーの。】
「それはそれは、ご迷惑お掛けして申し訳ありませんでしたーっと。」

通信機から流れる映像とギラムの声を聞きつつ、フィルスターは受け答えをした。

【・・・その様子だと、まったく気にしてねえみてえだなフィル。　今何処だ？】
「住居区のある扉の前。　今から帰るよ。」
【わかった。　早く帰って来いよ。】
「へいへい。」

ピッ

通信を終えると、買った物が入った紙袋を持ち直し、自室へと戻って行った。

思考を察する

「今戻ったぞー」

フィルスターは自室へ入ると同時に、部屋にいると思われる主人に対して声をかけた。だが返事が無い。

『風呂(シャワー)か?』

フィルスターは買ったものをベッドのそばに置き、ドレッシングルームを覗いた。部屋の奥にあるシャワールームの中から水が流れ落ちる音と人影が写っており、シャワーを浴びている様子だった。

「主ー 今戻ったぞー」

【フィルか、お帰り。 浴び終わったら出るから、それまで待ってろ。】

「俺は浴びねえよ。 まあごゆっくり。」

フィルスターはギラム本人である事を確認し終わると、ドレッシングルームを後にした。

数分後・・・

「フィル、待たせたな。」

シャワーを浴び終えたギラムは、洗い立ての髪をタオルで拭きつつ、ズボンのみを履いた井出達で出て来た。

「ショッピングモールでいろいろ買ってきたんだ。 食べるだろ？」

「お、わりいな。」

ベッドに座りつつ、ギラムは言った。

「で、何買ってきたんだ？」

「ベリベリータルト。」

フィルスターは紙袋からタルトを取り出し、ギラムに手渡した。

「お、タルトか。　ありがとさん。」

フィルスターからタルトを受け取り、一口食べた。

「ん、美味しい！！」

「新作なんだと。　今度食べに行けよ。」

「そうだな。　・・・それにしても美味しいな。」

ギラムはそのまま貰ったタルトを全て食べ終えた。

フィルスターはそんなギラムを見つつ、嬉しそうにしていた。

「そういえば今日は随分と長い買い物だったな。　なんか面白そうな物でも見つけたか？」

タルトを食べる時に使用した手をタオルで拭きつつ、ギラムはフィルスターに問いかけた。

「まあ面白そうなものはいろいろあった。　新作のパーツとかな。」

「新作か。　・・・お前いるのか？」

ギラムは話を一通り聞き、気になる点が浮かんだ。

「いるぜ？　一応シールドラインのシステムぐらいは入ってるんだから。」

「それもそうか。」

「まあ主みたいに分かりやすいシールドじゃないからな。　一応分かるようにはなってるが。」

フィルスターは自分の背中を見せつつ、ギラムに言った。

マシナリーの背中には光るパーツがついており、シールドラインの属性が分かるシステムとなっている。

「他には？」

「へ？」

フィルスターの背中を見た後、ギラムが言った。

「へ？じゃねえよ。見物にほぼ近い買い物ぐらいで5時間ぐらい使うわけないだろ。もう1つあるんじゃないか？」

『鋭い』『別にいい』

『絶対何かあったな・・・』

ギラムはそう言うと、フィルスターは内心毒づきつつ思った。

フィルスターの言い方に、ギラムも何かを察した。

「まあいいか。メンテナンスするか？」

「お、おう。」

フィルスターはそんなギラムに生返事をしつつ、膝に座った。

自分の膝に座った事を確認すると、ギラムはフィルスターの背中に社内用メンテナンスのコンセントを刺した。

「じゃ、しばらくそこにいろ。依頼でも見てくるからな。」

「行ってらー」

ギラムは上着を羽織ると、メンテナンス込みの充電をするフィルスターをベットに残し、部屋を後にした。

『アイツ結構勘がいいな。まあ隠す事でもなかったか・・・ いつか言おっと。』

フィルスターはそんな事を考えつつ機能をスリープモードに変え、ベットに横になった。

「・・・お休み。」

フィルスターはそう言うと、眼を閉じ寝てしまった。

部屋を後にしたギラムは、そのままの足でリトルウィングの社員ルームへと向かった。自動ドアが開くと同時に、ギラムの耳に騒ぎ立てるかの様な口論が入ってきた。

「オッサン！！ またツケの請求が来てたよ！！」

「ああ？ この前払っただろ？」

リトルウィング社内、エミリアがクラウチに対していつもの言い争いをしていた。

「それは先月の分でしょ！？ 今月のが未払いだってまた来たんだからね？」

『また借金の請求か・・・ クラウチも凝りねえな。』

ギラムはそう思いつつ、控えめに部屋へ入った。

借金の請求とは、クラウチが通う飲み屋のツケだ。

毎回未払いの時にエミリアの元へ通信が来る。だがさすがにおなじみ過ぎるのか、ギラムは何も言わない。

「また金が入って来たらな。お前が稼いでもいいんだぞ？」

「なんでオッサンなんかのためにアタシが働かなきゃいけないの！？」

「家族でもあり社員だからに決まってるだろーが。」

「うぐっ・・・」

そしてお決まりのように、エミリアが言葉に詰まっていた。

『でもこういう時っていつも・・・』

「！！ あ、いい時に来た！！」

『来た。』

ギラムが何かを察すると、エミリアはギラムの腕を掴んで来た。

「アンタもオッサンに何か言ってやってよ！！ アタシの言う事聞きやしないんだから！」

と、エミリアは年に似合いそうに無いセリフを言いつつ、ギラムをクラウチのいるデスクのそばへと引っ張った。

『まるで夫婦喧嘩だな・・・』

「コラ！ パートナーをダシに使ってんじゃねーよ！」

「ダシなんかに使ってないもん！ ほら、こんなぐうたら上司に何か言ってやって！」

ギラムが呆れる中、目の前で2人の口論は続く。

そして火の粉は自分の元へと来た。

『はあ。』

「・・・ クラウチ。」

「何だ？」

「今ココに来てる依頼書を見せてくれ。」

「ちっがーう！！ 何で依頼の事なの！？」

ギラムが言った事、それはココに着た用件だ。 なぜこのタイミングかは不明だ。
もちろんギラムが言った事に対してエミリアがOKを出すわけが無く、再び騒ぐ。

「ああ、来てっぞ。 これな。」

「どうも。 えっと・・・」

「オッサンも素直に渡すなっ！！ もー、ビースト2人してなんていうマイペースさなの。」

「お前もパートナーを見習え。 仕事熱心だなんていい事じゃねえか。」

クラウチはギラムからの一言が無かった事に内心嬉しがりつつ、そう言った。

「だああー！！ もういい！！ チェルシーに頼む
もん！！」

と、エミリアは言うのと、近くにあるチェルシーのデスクへと走って行った。

「・・・クラウチ。少しは払えよ、最低でも月払いじゃなくて週払いにな。」

ギラムは依頼書のリストを見つつ、クラウチに言った。

「お、こういう時に言うか。まあお前らしいけどな。」

「目の前で言ってアイツが黙る訳無いしな。この方が楽だ。」

クラウチの言った事に返事をしつつ、ギラムはリストに眼を通していく。

「金の目処はまあある。だがこういう事ぐらいしか、アイツとのコミュニケーションは無いからな。」

「入社時とは別の意味か。優しくすれば、それなりに来るだろ？」

「かもな。」

クラウチはそう言うと、デスクに座りなおし、エミリア曰くいかがわしい画像を見始めていく。

『ウルスラがいない間は、クラウチの天下って訳か・・・』

「じゃあこの依頼、後日行くぜ。」

「？ ああ、パルムの依頼だな。パーティはどうするんだ？」

クラウチはそのままの格好でリモコン操作をし、依頼書に必要事項を入れていく。

「とりあえずこの騒動にこれ以上首を突っ込みたく無いからな、俺とフィルだけで行く。エミリアには内密にしろ、今回の報酬の2割だ。」

「お前も計算高えな。まあコレで俺は楽できる出来てるようなもんだけどな。依頼主にはこっちから言うておく。」

「頼むぜ。」

ギラムはクラウチとの依頼話と、それについての交渉を交わし終わると、依頼書のリストを返した。

「・・・ああ、そうだ。最近入ってきた新入社員っているか？」

「新入社員？」

ギラムはふと思い出した事を、クラウチに話した。

「えっと・・・ ああ、いるぜ。 キャストの女が1人な。」

クラウチは今現在表示されている画面を変え、別のリストを見つつ言った。

「キャストか。 無くないな・・・」

「？ 何がだ？」

ギラムは呟くようにそう言うと、クラウチが首を突っ込んだ。

「いや、こっちの話だ。 アイツとは別件な。」

「恋か？」

ギラムがそう言うと、お決まりのジョークをクラウチは言った。

「毎回似たような事を言うのはなんだが、馬鹿か？」

「冗談だって。」

そしてギラムもお決まりの返事をした。

「用が済んだらさっさと行け。 また来っぞ。」

「そうするか。」

クラウチに進められ、ギラムは一足先に部屋を後にした。

依頼に誘う

社内での依頼交渉を終え、ギラムは自室ルームへと戻ってきた。

「ただいま。」

ギラムはフィルスターに対して挨拶をしたが、奥から返事が返ってこなかった。

『・・・寝てるのか？』

ギラムは部屋に入り、ベットがある奥の部屋へと向かった。

入ると、中にあるベットにフィルスターが横になっており、小さい体でベットを占領していた。

『スリープモード・・・ 疲れてたのか。』

ギラムは静かにベットに近寄り、フィルスター用のタオルケットをかけた。

『さてと、依頼は明日。 フィルが起きるまで武器の手入れ等でもしておくか。』

ギラムは倉庫に閉まって置いた主武装の武器を手に取り、隣の部屋へ移動した。

武器の手入れをギラムが始めようすると、

コンコンッ

『ん？』

不意にルームの扉をノックする音が。

ギラムは持っていた武器をテーブルに置き、扉の元へ

ウィーンッ

「誰だ？」

「あ、こんばんは。」

ギラムが扉のロックを解除し開けるとそこにはアリンのマシナリー、ウィンドベルがいた。

「・・・？ 何か用か？」

「フィルスターに用があって来たんですけど、いらっしゃいますか？」

「フィル??」

見知らぬマシナリーに自分のマシナリーの名前を呼ばれ、ギラムは少々驚いた。

「・・・居ることはいるが、今はメンテナンスしつつ寝てるぜ。」

「そうでしたか。」

ベルはギラムからそういわれると、素直に聞いた。

「・・・そうだ。 ちょっと聞きたい事があるのだが、時間を貰ってもいいか？」

「あ、はい。」

ギラムからそう言われ、ウィンドベルは部屋に入った。

それからしばらくして・・・

「うーん・・・」

ベットを占領していたフィルスターが眼を覚まし、体を起こした。

「・・・あれ、なんでタオルが。」

「ん、フィル。 起きたか？」

フィルスターは自分にかけてられたタオルケットを見つつ考えていると、奥からギラムの声がした。

「主、帰ってたのか。」

フィルスターはベットから降りると、声のした方へと向かって行った。

「依頼も貰ってきた。明日俺と一緒に頼む。」

「へいへい・・・っ!？」

「あっ。」

フィルスターはタオルケットを片手にギラムの元へと向かうと、

「ウィンドベル!？」

そこにはギラムとウィンドベルが、ソファに座っていたのだ。

「おはようございます、フィルスター」

驚くフィルスターを置き、ベルは挨拶をした。

「やっぱりそう言うことか。フィル、ベル達と話をしてたから遅くなったんだな？」

「・・・言う前にバレたか。言おうとは思ってたんだぜ？」

「まあそうだろうな。隠す事でも無いし。」

ギラムはフィルスターの背中に接続されたままのコンセントを抜き、コードを回収した。

「ウィンドベル、よくココの部屋がわかったな。」

「パートナーカードに番号が書いてあったので。ベルって呼んでください。」

「・・・じゃあ、俺はフィルで。」

「はい。」

2人は仲良く話をしつつ、そう言った。

「ベル、お前のご主人は？」

「僕の主はアリンさんです。 つい最近入った、キャストの女性です。」

「新入社員か。」

ギラムはウィンドベルから主人の名前を聞き、新入社員だということも知った。

「じゃあ、依頼とかはまだ行って無いか？」

「はい。 いろいろと準備や手続きがあるそうで、今日全部終わった所です。」

「じゃあ俺らと行かねえか？ 依頼しに。」

ウィンドベルがそう言うと、フィルスターはとっさに言った。

「でも、お邪魔じゃないですか？ アリンさん、戦いは未経験だと言っていたので。」

ウィンドベルはアリンの経歴を2人に話した。

「大丈夫、未経験者の扱いには慣れてる。」

「俺の主は未経験者の彼女がいるからな。」

「だからちがうっつってんだろ。」

フィルスターの言った事にギラムは否定しつつ、フィルスターを小突いた。

「ちなみに、何処へ？」

「惑星パルムで原生生物の駆除作業だ。 海底レリクスでの作業だ。」

「わかりました。 聞いてみますね。」

ウィンドベルはそう言うと、通信機を起動しアリンに繋いだ。

「アリンさん、フィルの主のギラムさんからミッションの誘いを頂きました。 どうしますか？」

【フィルちゃんのご主人？ どなた？】

「俺だ。」

ウィンドベルの通信映像射程にギラムは入り、アリンに顔を見せた。

【貴方が・・・ギラムさん？】

「ああ、本名はギラム・ギクワだ。」

【私はアリン・カーネ。 アリンとお呼びください。】

「よろしく、アリン。」

ギラムが自己紹介をすると、アリンも同じく自己紹介をした。

「明日、惑星パルムでレリクス内の原生生物を駆除しに行くんだ。 パーティって事で同行してみないか？」

【ベルちゃんとですか？】

「そうだ。 ベルと俺とフィルとな。 報酬はそれなりに出るし、ベルと2人で初ミッションより、身の危険性は比較的低いと思うんだが。 どうだ？」

ギラムは今回のミッションの同行者、報酬と利点を告げた。

【わかりました。 そこまで何か出来るかはわかりませんが、同行させてもらってもいいですか？】

「いいぜ。 クラウチにはこっちから言っておく。 明日俺達のマイシップに来てくれ、場所はベルに教えておく。」

【はい。 では明日、よろしく願います。】

アリンはそう言うと、通信を終えた。

「じゃあ俺、もう1回クラウチの所へ行ってくる。」

「はい、わかりました。」

「・・・っと、その前に。」

部屋を出て行こうとしたギラムは、用を思い出し2人の元へ

「コレ、俺のパートナーカードな。 先に交換しておいてもらってもいいか？」

「あ、はい。 アリンさんのも持って来ておいてよかった。」

「準備がいいな。」

ウィンドベルは持っていた2枚のパートナーカードをギラムに手渡し、交換した。

「じゃあ行ってくるぜ。」

「いってらー」

ギラムは2人にそう告げると、見送られつつ部屋を後にした。

「じゃあ僕はこれで。」

ギラムが出て行くのを見送った後、ウィンドベルはフィルスターに言った。

「おう、また明日な。」

「はい。ではまた明日。」

パートナーカードをしまうと、ウィンドベルは部屋を後にした。

『さてと。』

ウィンドベルが部屋を出て行くと、フィルはスター持っていたタオルケットを軽く畳み、使っていたベットを直しに行った。

その後しばらくして、ギラムが再び疲れたような顔をして戻ってきたのは言うまでも無いだろう。

「・・・お休み。」

「おう。」

ギラムは戻ってくると、そのままベットへと入り寝てしまった。

『相当疲れたんだな・・・面倒事は俺には似合わねえな。』

そんなギラムの様子を見終わった後、フィルスターは窓辺へ。

外はいつもと同じく綺麗な流れ星が流れており、とても綺麗だった。

『・・・さてと、俺も寝っか。』

フィルスターは外を見終わると、すでに寝息を立てているギラムの隣に横になり、タオルケットをかけ寝てしまった。

朝を迎える

ギラム達が床について数時間後。

「うーん・・・」

ギラムの隣に寝ていたフィルスターは眼を覚まし、眼を擦っていた。

その後体を起こし、隣を見た。

そこにはまだ眠りの世界に出たままのギラムがおり、寝た時同様に寝息を立てていた。

『任務の時間はもう少しだな、じゃあ朝飯か。』

フィルスターはギラムを起こさない様にベットから下り、背伸びをした。

「う、うーん・・・ ふう。」

伸び終わると、持っていたタオルケットをベットに置き、財布を持って部屋を後にした。

フィルスターが向かった場所。 それは同じエリアにあるカフェだ。

「いらっしゃいませー」

「えっと、ハンバーガー4個とサンドイッチ2個。 あと牛乳とGHドリンク1個ずつ。」

「はい。」

定員の挨拶を聞きつつ、フィルスターはいつものモーニングメニューを頼んだ。

フィルスターの朝の仕事。 それは主であるギラムの朝食の買出しだ。

基本依頼をこなして毎日を過ごしている傭兵達はお金があるため、社内の食事で毎日を過ごしているといっても過言ではない。

ギラムもその1人で、クラウチに2，3割近くの依頼料を時々払ってはいるものの、お金はあるためこうして買い食いをしている。

単にキッチンが無いからといっても間違いではないのかもしれない。

「お待たせしましたー」

「どうも。」

フィルスターはお金を支払い、朝食の入った紙袋を受け取りカフェを後にした。

ウィーンッ

「お帰りフィル。」

フィルスターはそのままの足で自室へと戻ると、ギラムが眼を覚ましていた。

「朝飯買った来たぜ。」

「ご苦労さん。」

フィルスターは持っていた紙袋をギラムに渡した。

「フィルのはどれだ？」

「ドリンクだけだ。」

「はいよ。」

ギラムは紙袋からマシナリー用のドリンクを出し、フィルスターに手渡した。

「いただきまーす。」

朝日は昇らない朝を部屋に迎えつつ、2人は朝食を食べ始めた。

「それにしても、朝からよくそんなに食えるよな。毎度の事ながら。」

「ん？ そうか？」

フィルスターは買ってきたドリンクを飲みつつ、ギラムに言った。

「単に体系が違いすぎるからかもしれないが、普通朝からパン系統を7個も食わねえよ。しかもそれに牛乳1リットル付き。」

「朝はコレくらい食わねえと活動できねえよ。メニューは大体一緒だけだな。」

ギラムは最後のハンバーガーを食べつつ言った。

「ま、背丈2メートル手前で88キロちょいなら普通か。 ご馳走様。」

「ご馳走様。」

『しかも結構早食い・・・ 俺が遅いだけかもしれないけど。』

フィルスターは買ってきた朝食に巻かれていたビニールを紙袋にいれ、ゴミ箱へ捨てた。

「さてと、そろそろ行くか。」

「そうだな。」

2人はそう言うと、夜に用意した武器を装備し、部屋を後にした。

マイルームを後にしたギラムとフィルスターは、その足のままロビーを移動し、普段任務で使用しているマイシップへと移動した。

定期的にフィルスターが清掃しているため車内は清潔感が漂っており、操縦桿も座席も綺麗な白色を出していた。

しばらく2人がマイシップ内で待機していると、

ピピッ ピピッ

フィルスターの通信機が、着信を告げた。

ピッ

「おはようベル。 場所わかりそうか？」

通信機に出た着信元の名前を見つつ、フィルスターはそう言った。

【おはようございます、フィル。 はい、大丈夫ですよ。 今部屋を出ましたので、もう少し待っててください。】

画面に映ったウィンドベルは画面越しのフィルスターを見つつ、そう言った。

「ああ、わかった。 主にもそう伝えとく。」

フィルスターはそう言うと通信を切った。

「もうすぐ来るってさ。 座標あわせて、スタンバイしておくか？」

「そうだな。」

ギラムにそう言われ、フィルスターはマイシップに移動先の座標を打ち込みだした。

その間、ギラムはフィルスターの作業過程を見守りつつ、アリンとウィンドベルの到着を待った。

その数分後、アリン達がギラム達のいるマイシップへと到着し、惑星パルムへと向かって出発して行った。

クラッド6から飛び出し、数分後・・・

4人は依頼のあった惑星パルムの海底レリクスへと到着した。

「着いたぜ。」

マイシップを降りた4人は、その足でレリクスへと向かい、扉を開けた。

すると、中には古代文明の遺産と思われる厳かな創りの部屋となっており、壁際の至る所から、水の流れる音が聞こえた。

「ここが、レリクスですか？」

初めて行った場所に少々戸惑いつつ、アリンはギラムに問いかけた。

「ああ。　ここが今回の依頼のあった場所だ。」

「もう少し行った先に、原生生物がいるってさ。」

2人はそう言うと、それぞれがいつも使用している武器を装備した。

ギラムはツインダガーを、フィルスターはライフルをそれぞれ装備した。

「今回のお仕事の内容は、増えた原生生物の駆除です。　頑張りましょうアリンさん。」

ウィンドベルは主であるアリンにそう言うと、ロッドを装備した。

「・・・」

3人の慣れた手付きを見て、アリンは少々その場に立ち止まってしまった。

「アリンさん？」

その様子を見て、ウィンドベルは少々心配そうに彼女を見た。

慣れない現場での作業をする事になり、慣れていない人がすぐさま行動するのには無理がある。

彼女もその内の1人であり、エミリア以上に不慣れに見えた。

すでにレリクス内に入ったギラム達に対して、アリンは扉付近に立ち止まったまま、迷っている様子だった。

「最初は誰だって戸惑うから、見よう見真似でやってみれくれ。」

その様子を見て、ギラムは励ます様に言った。

「先頭は俺が引き受ける。　アリンは自分が出来そうな行動を見つけたら、その行動をしてくれ。
。　フォースだから、基

本は魔法(テクニク)での援護だな。」

「僕もお手伝いします。　頑張りましょう、アリンさん。」

ギラムとウィンドベルはそう言い、その場に止まったアリンに対して言った。

「・・・はい。出来る限り、頑張らせていただきます。」

2人の励ましを受け、アリンは顔を上げ、手にロッドを手にした。
すでにウィンドベルから使用方法を聞いていたためか、テクニックがリンクされていた。
何のテクニックがリンクされているかは解らないが、それなりの物がセットされているのは確かだった。

「行きましょう、ギラムさん。」

ロッドを改めて持ち直し、アリンは顔色を明るくしつつ言った。

「了解。 フィル、援護頼むぜ。」

「はいはい。 主ー」

4人は万全の体制になり、原生生物が沸くエリアへと向かって行った。

戦いを迎える

惑星パルム内にある海底レリクスのとあるエリア。

そこでは、武器を手に戦う傭兵達の姿があった。

「さあて、一曲行かせてもらおうか！」

退治する原生生物を目にし、果敢にもギラムはツインダガーを手に突撃して行った。

もちろんそんなギラムを見て、大人しく立っている原生生物達ではなく、自らが持つ攻撃手段で挑んだ。

〈シャアー！〉

エビルシャークの振り被った手の鎌を見て、ギラムは持っていた片方のダガーで攻撃を防いだ。

「遅いっ！」

相手の攻撃を無効化した事を見て、ギラムはそのまま左手のダガーで相手を切り、回し蹴りを放ち遠くへと飛ばした。

攻撃を食らったエビルシャークは、そのまま蹴られた方向へと飛ばされ、飛んだ先にいる原生生物達を巻き込んで行った。

〈シャアー！〉

攻撃の被害を負わなかった別のエビルシャークは、ギラムめがけて跳びかかって来た。

「後ろか・・・っ！」

その声と動作を目にし、ギラムは振り返りつつ防御する体制へ。

すると、

パンッ！

どこからともなく放たれた弾丸を喰らい、エビルシャークがギラムのいる場所の手前で落下した。

「主、カッコわりいぜ。」

ライフルを抱え、ターゲットを打ち抜いた事を確認したフィルスターは、ギラムに対してそう言った。

「よく言うぜ。 接近戦闘はの面倒だって言ってんのはそっちだろ。」

目の前の敵が消滅したのを確認し、ギラムはそう言いつつ武器を構えなおした。

「あたりめえじゃん。 柄にも無く決めて何がいいんだか。」

ギラムの言った事に対して、フィルスターはそう言った。

「フィル、後ろ。」

「おっと！」

ギラムの言った事を聞き、フィルスターは武器をショットガンに持ち替え、接近してくる小型の原生生物達に対して打ち放った。

拡散銃のため、弾丸は前方へと飛び出し、バジラ達を一掃した。

「さっすが主ー」

「言ってる事真逆だぜフィル。 このまま片付けるぞ！」

フィルスターの撃った攻撃によりバジラ達が消滅すると、ギラムはそう言いつつ武器をハンドガンに持ち替えた。

「力を！」

パンッ！

遠くから接近してくる敵に向かって、ギラムはハンドガンから強力なチャージショットをお見舞いした。

接近していたヴァルガタスはその攻撃を喰らい、硬い鱗に重い一撃の後を残して消滅した。

「軽く行動しろってか。 寝てもいいか？」

「駄目だ。」

「はいはい。」

2人はいつもの軽いやり取りを交わした後、再び正面に立つ敵に向かって行った。

「す、凄いですね・・・ ギラムさんとフィルちゃん。」

そんな2人のやり取りを遠くから見守っていたアリンは、ロッドを手にしたまま棒立ちになっていた。

果敢に接近戦で戦いつつも、相手の援護をし、華麗な行動と会話をする暇がある事に対して、尊敬していた。

「アリンさん！ 前！」

「えっ！」

2人の様子を見ていたアリンに対して、ウィンドベルは接近してくる敵を目にし言った。

隙を突いてきたエビルシャークは、機敏なステップを踏みつつ接近し、アリンに攻撃をしようとしていた。

「キャア！」

「ギ・フォイエ！」

アリンが動けない事を察し、ウィンドベルはアリンの元へと瞬時に移動し、炎をテクニクを放った。

すると、炎の波を食らったエビルシャークはその場から吹き飛ばされ、数メートル離れた場所へと飛んでいった。

「ありがとう、ベルちゃん・・・」

自分のパートナーマシナリーに助けられ、アリンは礼を言った。

「僕も援護します、頑張りましょう！」

励ます様にウィンドベルはそう言うと、アリンの目を見た。
部屋にいたいつもの彼とは少し違い、今は必死な眼差しを見せていた。

「え、ええ。」

そんな必死なウィンドベルを見て、アリンは気合を入れなおし、ロッドを握りなおした。
そして、起き上がったエビルシャークに対して、テクニックを放った。

「フリーズ！」

アリンの持っていたロッドからテクニックが発動され、エビルシャークの上方に氷の塊が発生し、敵を押し付けた。

その拍子に周囲にいたバジラ達は攻撃を受け、凍りついた。

「さすがです！ アリンさん！」

「や、やった……」

放ったテクニック後の敵を見て、アリンは安堵の表情を見せつつ言った。

「後は僕が片付けます。」

「ええ、お願いします。」

周りの敵があらかた片付いた事を確認し、ウィンドベルは両手にセイバーを持ち、凍った敵の排除へと向かって行った。

『私でも、お役に立てたでしょうか……』

ロッドを握ったままアリンはそう思い、ギラムのいる方を見た。
すると、その視線に気がついたギラムは彼女の方へ振り向き、軽い笑顔を見せつつグットサインを出した。

『よかった。』

ギラムの行動を見て、アリンは笑顔でそのコンタクトに答えた。

数分後・・・

「よし。 これで一通り片付いたな。」

原生生物の沸いていたそれぞれのフロアの駆除作業を終え、ギラムは部屋を見渡しつつ言った。倒した原生生物は姿を消し、レリクス内は静寂に包まれた。時々水の流れる音が聞こえるが、それ以外の音は聞こえなかった。

「目標の個体数まで減ったからな。 依頼はこれで完了だぜ。」

周囲の原生生物反応を確認し、フィルスターはギラムに伝えた。

「そうか。 お疲れベル、アリン。」

「お疲れ様、ギラムさん。」

「お疲れー」

その報告を聞き、3人は武器をしまい、全員に声を掛け合った。

「・・・でも、さすが傭兵さんですね。 私、何も出来ませんでした・・・」

敵がいなくなった周囲を見つつ、アリンはギラムに言った。

「最初に何でも出来るってわけじゃないしな。 でもアリンの行動も悪くなかった、良いと思うぜ。」

少し寂しそうに言うアリンに対して、ギラムはフォローするかのよう優しく言った。

「そ・・・そうですか？」

「ああ。」

その返事を聞き、アリンは少し驚いた表情をしつつ彼を見た。
先ほどまでの戦いの後にしても息一つ乱れておらず、平然とその場で会話をしていた。
慣れているというのもあるのだろうが、それでも充実した生活を送っているようだ。

アリンはそんな彼の表情を見ていると、安心感を得られる感覚にいた。
少しだけ、信頼出来る人だと思ったのだろう。

「さてと。 後はリーダーを止めるだけか。」

「そうだな。」

そんな束の間の休息を取り終わると、不意にギラムがそう言い出し、フィルスターも相槌を打った。

どうやらまだ仕事は終わっていないようだ。

「ギラムさん。 まだ敵がいるんですか？」

「ああ、この先の広間にな。 一度止まった奴なんだが、時々こうやって動き出すんだ。」

アリンからの問いかけにそう答えると、再びギラムは武器を装備し、奥の部屋へと向かって歩いて行った。

後に続いて、フィルスターがショットガンを持って着いて行く。

「アリンさん。 僕らも行きましょうか。」

「え、ええ・・・」

その場に立ち止まっていた主人を促すようにウィンドベルはそう言った。
いつの間にか彼の手にはロッドが持たれており、彼ら同様にいつでも戦える状態のようだった。
そんな彼を見て戦闘する態勢になると、アリンは右手にセイバーを持ち、彼とともにギラム達の後を追って行った。

ガシャンッ・・・

「さっそくやってきたか。」

遅れてアリンとウィンドベルがギラムの元へと着くと、部屋の奥を見ていたギラムがそう呟いた。

着たばかりのアリンには、誰がやってきたのかわからなかったため、その場から軽く走り相手を見ようと移動した。

「・・・！！」

するとそこにいたのは、レリクスの壁際に鎮座されていた自立起動兵器の1体で、『スヴァルティア』と呼ばれていた。

手には大型の大斧に近い武器を持っており、手は兵器にふさわしく鋭い爪を持っていた。

体の至る所から電気が流れており、電力で動いているかのようだった。

だが動きは遅く、ゆっくりとギラム達の下へと向かっていた。

「あ・・・あれ・・・」

「自立起動兵機スヴァルティアだ。レリクスではよく停止した状態で保管されてて、時折こうやって動き出すんだ。」

敵の姿を目にしたアリンの震える声に対して、ギラムはわかりやすい様に簡単に説明した。

「・・・」

「さてと。今回は少ないみたいだし、さっさと片付け」

「ア、アリンさん！　しっかり！！」

「？」

敵の弱点である闇属性の武器を持って移動しようとしたギラムの耳に、ウィンドベルの声が入り、2人は後ろを向いた。

するとそこにはその場に座り込んでしまったアリンの姿と、それを必死に立たせようとするウィンドベルの姿があった。

「おいアリン！ どうした！？」

慌ててアリンの元に駆け寄り、ギラムは安否を確かめようとした。
だが彼女の目には彼は映っておらず、怯えた目でスヴァルティアを見ていた。

「アリンさんは・・・ スヴァルティアが・・・！」

「主！ 来たぞ！」

そんな緊急事態さえも気にせず、ゆっくりとこちらにやってきたスヴァルティアをフィルスターは叫んで主に伝えた。

「チッ、このままじゃ不味いな。 フィル、ベル！ すまないが時間を稼いでくれ！ アリンを安全な場所まで運ぶ！」

戦うどころか逃げることも出来ない彼女を見て、ギラムは慌ててアリンを抱え上げ、フィルスターとウィンドベルに向かって言い放った。

「む、無茶言うな主！！ 俺ショットガンだぞ！？」

「いいからやれ！ すぐ戻る！」

2人にそう言うと、ギラムはアリンを抱えたまま、急いで元来た道を走って戻って行った。
その場に残されたパートナーマシンナーは、仕方ないとばかりに主力武器へと武器を変更した。

「俺もなるべく前に出て戦う。 ベルは隙を見てあいつの行動を止めてくれ！」

「わかりました！」

ライフルのチャージショットを充電しつつ、フィルスターはウィンドベルに行動プランを伝えた。
。 それに対してウィンドベルが答えると、セイバーを両手に持ち、果敢にも大型の敵相手に突撃して行った。

「アリンさんの仇・・・ 貴方には止まってもらいます！！」

「主が戻るまで、やられるわけにはいかねえんだよ！！」

そして2人は、時間を稼ぐべく戦いの中へと身を投じた。

温かさを感じる

「・・・とりあえず、ここなら敵は来ないな。」

フィルスターとウィンドベルに足止めを頼み、一度元来た道に戻りとある小部屋へとやってきたギラム。

お姫様抱っこで運んできたアリンを一度地面へとおろし、彼女の顔色を伺った。

「・・・大丈夫か？」

「え、ええ・・・　・・・ごめんなさい、お手を煩わせてしまって・・・」

「気にするな。　これくらい平気さ。」

問いかけに対する返事をする、アリンは静かにその場に立ち上がった。

立つための支えがいつでも出来る体制で、ギラムはそんな彼女を見守った。

「・・・スヴァルティアが苦手だったのか。　すまないな、気がついてやれなくて。」

「いいえ。　・・・私こそ、あの兵器を見たとたんに座り込んでしまって・・・　・・・やっぱり、私は何も出来なかった・・・」

侘びをしていたギラムに対して、アリンは侘びをしつつ顔を両手で軽く隠してしまった。

人工的に作られたキャストとは思えないほど精密な動きをし、目から軽く涙を流した。

「・・・私は・・・　元々パルムに所在していた元財閥の一人娘・・・アリン・カーネ。　スヴァルティアに一度、屋敷を襲われました・・・」

「スヴァルティアに・・・」

そしてそのまま、自分の正体を喋りだした。

惑星パルムでGRM社の親戚会社として肩を並べる大組織財閥。

アリンはその家の一人娘として創られ、日々を過ごしていた。

もちろん身に着けるパーツは普通の物とは違いゴージャスかつ煌びやかな衣装が多かった。

まさにお嬢様にふさわしい過ごし方をしてきたのだ。

だがある日・・・

アリンの家である屋敷を、周囲で発見されたレリクスから出てきたスヴァルティアの大群に襲われ、彼女は全てを失ったのだ。

屋敷の使用人達であるキャスト達は必死に彼女の身を優先して動き、犠牲者を多数出した。そんなガードと犠牲を受けつつ、彼女は自家用マイシップに乗せられ、急遽パルムを脱出する事になったのだ。

それからしばらくの間、グラール太陽系の宇宙をマイシップで彷徨い、涙を流していた。

自分のために、大切な人達が犠牲になってしまった。

自分に残されたものが、全て失ってしまった。

ヒトりに、なってしまった・・・

今まで経験した事のない酷い孤独感を感じ、彼女はいつも悲しみの中にいた。

その後彼女を乗せたマイシップはリトルウィングへと運ばれ、彼女をその中へと運び入れた。

そして、アリンは自らの意思で会社内で過ごす事を決意し、署名をした。

「そうだったのか・・・ そうなると、パルムのレリクスは今一番行きたくない場所だった訳か・・・」

話を一通り聞き、ギラムはアリンがスヴァルティアを苦手とする理由を知った。

「・・・いいえ、ギラムさんのお仕事は私が決める訳ではありません。 お気に、なさらないで下さい。」

「でも、すまなかった。」

「・・・ギラムさん・・・」

暗そうな顔をするギラムを見て、アリンは慌てて彼を励まそうとした。

だが、無責任にも相手が行きたくない場所をピンポイントで行ってしまった事に対して、ギラムはやはり悔しいようだった。

「・・・アリン。 侘びをさせてくれ。」

「え・・・」

少し気まずいムードが漂っていたことに困っていたアリンに対して、ギラムは顔を上げそう告げた。

その言葉に対して、アリンは少し驚いた表情を見せた。

「俺が相手を悲しませる事をしてしまった事に対してじゃない。 アリンが、泣かないようにするための行動をさせてくれ。」

「・・・それって、どういう意味ですか・・・？」

不意にギラムが言った事に対しての理解が出来ず、アリンは再び問いかけた。

「誰も涙を流す事を望んでいない、悲しみの記憶に漬かる事もだ。 俺はもう二度と、そんな思いをさせないと決めた。・・・」

「・・・」

「アイツを止めてみせる。 そしてアリン、お前の事を助けるぜ。」

アリンからの問いかけに対する答えを全て告げた後、ギラムは再び武器を手にし、もと来た道に戻って行った。

「・・・」

そんな彼の後姿を見つつ姿が消えたのを確認すると、アリンは震える足を頑張って動かし、ゆっくりと前へと歩きだした。

「主い——！！ 早くう！！」

一方大型起動兵器を数体相手にしているフィルスターとウィンドベル。
先ほどから遠距離射撃をするものの、硬い皮膚を貫けない自分の弾丸で、フィルスターは大声でギラムに向かって叫んでいた。

「うわあぁっ！！」

一方、戦闘タイプ上近距離攻撃が苦手なはずのウィンドベルは必死にセイバーを両手に戦っていたが、不意な攻撃をくらい、こちらに転がってきた。

「ベル！！」

慌ててフィルスターはウィンドベルの元へと移動し、回復テクニックであるレスタを唱えた。

「フィル！ 逃げましょう！ 僕らだけじゃ無理ですっ！」

ひとまずその場に起き上がりつつ、ウィンドベルは言った。

「馬鹿言えっ！ 逃げた所でこいつらから逃げられるわけねえだろ！ 主達をどうすんだ！」
「でもっ！」

「待たせたな！ フィル、ベル！」

パートナーマシナリーの中で大型の分類に入る2人が苦戦していると、守っていた通路付近から声が聞こえた。

2人が後ろへと振り向くと、そこには主武装であるツインダガーを持ったギラムがこちらに向かって駆けてきていた。

「主！」

「さあ！ 俺の本気、見せてやる！！ ・ ・ ・ グワァアアアア！！」

一定の場所まで走ると、ギラムは体を前のめりにし力を溜めるかのような動作をすると、一気に溜めていた力を解放した。

すると、その場には白銀の体毛の姿をした銀狐に近い獣人が立っていた。

頭の上には突き出た耳が立っており、先ほどまでの金髪は白銀に姿を変えていた。

体の至る所にある筋肉は大きく発達し、とても力強そうな印象をかもし出していた。

「疾風のナノブラスト！」

【吹き荒れる疾風、全部見切れるかなあ！！ 覚悟しろ！！】

必殺技であるナノブラスト状態になったギラムはそう叫ぶと、周囲の風と共にスヴァルティアへと特攻して行った。

もちろん、そんな敵に対して怯むことの無いスヴァルティアは持っていた武器を大きく振り上げ、ギラムめがけて振り下ろした。

ガスッ！

すると、さきほどまでそこに立っていたギラムの姿は無く、武器の触れた場所そのまま地面に窪みを作った。

【後ろがあいてるぜ！！】

[!]

その隙に敵の背後へと入り込んだギラムはそう言うと、片足を大きく上げ、そのまま敵を蹴りこんだ。

もちろんそんな攻撃だけでは終わらず、目にも留まらぬ連続攻撃をしだし、両腕の裏から発達した鎌の様な部分もつかい、相手を切りかかった。

そして一通りのスヴァルティアへの攻撃が済むと、ギラムはその場でジャンプし、周囲の風を巻き込み始めた。

「主！ やっちまええー！！」

後方でその行動を見ていたフィルスターは、ギラムに向かってそう叫んだ。

【言われなくてもそうするさ！】

声に対しての返事をした後、ギラムはそのまま大きな体を使い、自分を軸にして竜巻を発生させた。

その風に巻き込まれ、立っていたスヴァルティアは巻き込まれ、無数のカマイタチが襲った。

【吹き飛びなっ！】

バシュッ！

軸部分でギラムは巨大な竜巻をそのまま両手で吹き飛ばし、その風圧で相手を攻撃した。

そんな連続攻撃に耐え切れず、何体ものスヴァルティアは破損の大きさから機能を次々に停止しだし、その場に倒れた。

ドスンッ……

「やった……！ フィル！ 勝ちましたよ！ ギラムさんが！！」

「ああ！ 主！さすがだぜ！！」

目の前で止まり横になった敵の大群を目にし、ウィンドベルはそう言った。

その行動を見てフィルスターもそういい、前方で元の姿に戻ったギラムに対して叫んだ。

すると、その声を聞き、ギラムはフィルスター達の方へと振り向き、敵が全て止まった事を合図した。

「……！ スヴァルティアが……」

そんな3人の元へと戻ってきたアリンは、止まり倒れていたスヴァルティアを目にし、驚いた声を上げた。

「アリンさん、ギラムさんが全て倒してくれました！ 僕達の勝ちです！」

「え、ええ・・・」

全力で戦い、最後はギラムが終わらせてくれた事に喜ぶウィンドベルは、アリンの手を取り、笑顔を見せた。

その様子にあリンは安堵の表情を見せた後、こちらへと戻ってきたギラムを見た。

「アリン。 敵は全て機能停止、もう動き出すことは無いだろ。」

「・・・！ ギラムさん、ありがとうございますっ・・・！」

報告を聞き、アリンは軽く涙を流しつつ、お礼を告げた。

「・・・さてと。 アリン、これからどうするんだ？」

レリクス内での事後処理を済ませた後、ギラムはマイシップへと戻りつつアリンに問いかけた。

「多分、またしばらくはベルちゃんとの静かな暮らしをするつもりです。 仲の良い方は、いらっしやらないので・・・」

「何言ってんだアリン。 もう俺らが仲間じゃないか。」

「え・・・？」

問いかけに対する返事をする、フィルスターにそう言われアリンは驚いた表情を見せた。

「ああ、少なくとも俺らはそう思ってるぜ。 共に依頼をこなした、仲間だしな。」

「そうそう。 アリンも初依頼でこんなに活躍したし、全然筋も悪くないじゃん。」

フィルスターの発言にギラムもそういうと、2人は笑顔でそう告げた。

「・・・でも、私・・・ 足ばかり引っ張って・・・」

「そんな事無いですよ、アリンさん。」

再び顔色を暗くする主人を見て、ウィンドベルは歩きつつ手を繋いだ。

「僕も見ましたが、アリンさんはすごく頑張っていました。 それに、ギラムさんとフィルと一緒に居たアリンさん、とても楽しそうでしたよ。」

「・・・」

ウィンドベルにそういわれ、アリンは黙ったまま彼の手を握りかえした。その一言がとても嬉しいという、彼女なりの返事だったのかもしれない。

「・・・あ、そうだ。 せっかくだし、このまま俺らでパーティでも作らないか？」

「パーティ？」

ひとまずアリンが元気になった事を見て、フィルスターはそう提案した。その声を聞き、ギラム達は驚いた表情で彼を見た。

「今んところ、どうせ社内で地道に行動してるだけで面白いことなんてなかったじゃん。 主も主でそこまで交友関係良くねぇし、アリンも不慣れだし。 主なら、腕あるから多少の事はぜーんぶやってくれるぜ？」

「パーティ・・・」

フィルスターの提案と経緯を軽く聞き、アリンは不思議そうにそう呟いた。しばらく考える様子を見せた後、アリンはギラムを見た。

「俺は別にいいぜ。 アリンの事はこれからもしばらく様子が見たかったし、なによりフィルが初めてつくった友人だ。 仲良くしてくれれば、それで十分だ。」

相手の主人の答えを聞こうとしていたアリンを見てか、ギラムはそう答えた。

「僕もフィルと一緒にコレからもお話が出来れば嬉しいです。 アリンさんも、もう1人じゃなくなりますよ。 家族、仲間です！」

「家族・・・」

「そうです、家族です！」

ウィンドベルはそういうと、アリンに抱きついた。

彼なりの喜びの表現もあり、彼女の事を考えての行動のようだった。

「・・・嬉しいです。 私のために、提案してくださるなんて・・・」

そんな彼を優しく抱いた後、アリンはそう呟いた。

3人の思いと、暖かさを身を感じた様だった。

「じゃあ！」

「はい。 私、アリン・カーネもそのパーティに参加しますね。 以後、お見知りおきを。 ギラムさん、フィルちゃん。」

「ああ、よろしくな。 アリン。」

アリンからの返事を聞くと、ギラムはそういいつつ、手を差し出した。

その手を見て彼女も手を出し、握手をした。

そして4人は、そのままマイシップへと乗り込み、クラッド6へと帰って行った。

コレが、後のイーサン、エミリアの英雄伝説の背後で動く新参パーティ『ジュライ☆エターナル』の設立動機と、その依頼後の会話なのであった。

－E P I S O D E E N D－